

## 待降節第三主日

2015.12.13

ルカ 3・10-18

待降節第三主日の今日の福音には、先週の待降節第二主日に続いて、洗礼者ヨハネのことばが響いています。ヨハネの評判を伝え聞いて、ヨルダン川の洗礼者のもとに押し寄せて来た人々の心のうちには、この時代の多くのユダヤの人々の心のうちに燃え立っていた、メシアに対する期待の思いがますます高まっていたことでしょう。旧約の預言者たちが告げているメシアこそ、長い間、外国の勢力の支配の下に置かれて苦しい生活を強いられ、神の民としての誇りを傷つけられてきたユダヤの人々にとって、彼らの心の拠りどころとしての、神が自分たちに約束してくださった救い主であったのです。この世界が終末を迎えるとき、人の子のような方が天の雲に乗って来るというダニエルが見た幻は、メシア預言と重なって、この世の悪のすべてが裁かれる神の国の到来を告げていると受け取られていたのです。洗礼者ヨハネのことばは、人々のうちにそのような期待を抱かせずにはおこななかったのです。洗礼者ヨハネが生きた時代、ユダヤの民衆の間には、このような終末への彼らの信仰による期待が燃え上がっていたのです。

「ときは満ちた。神の国は近づいた」というイエスの宣言はこのような時代の期待に応えるものであったのです。どれほどのときが過ぎようと、ときの中に生きるすべてのものにとって、時の終わりをもたらす終末は常に目の前にあります。わたしたちもまた、終末を目前にした時代を生きているといえるでしょう。そのようなわたしたちにとっても洗礼者ヨハネのことばは決して無縁なものでありません。降誕祭を前にした待降節、イエス・キリストをメシアと信じるわたしたちは、イエス・キリストがもたらしてくださる神の国の救いへの希望を新たにしなければなりません。今日の福音に響く洗礼者ヨハネのことばは、このミサの中にお迎えするイエス・キリストを指し示しています。

「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をおさずけになる」。聖霊と火による洗礼ということでヨハネが言おうとしていることは、それに続く次のことばから明らかです。「その方は、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻は消えることのない火で焼き払われる」。

イエス・キリストの到来によって、このような収穫のときが来ると洗礼者ヨハネは言っているのです。それは終末のときの、創造主である神による収穫のときです。そのときには、殻は消えることのない火で焼き払われ、麦は集められて倉に納められることになるのです。わたしたちの何が麦の実で何が籾殻か、

そのときになれば、明らかになるであろうと洗礼者は告げているのです。

パウロのコリントの教会への手紙を思い起こしてみれば、最後に残るのは信仰と希望と愛ということになります。そしてそのうちに愛が最も偉大であるとパウロは述べています。パウロのこのことばとつき合わせて考えてみるなら、消えることのない火で焼きつくされるのではない、天の国の倉に納められる実りは愛以外にはないということになります。イエスが最後の晩餐で残されたことばにしたがって、イエスが愛してくださったように、わたしたちもお互いに愛し合うことによって、神の国の倉に納められるべき実を結ぶことができるようお互いの絆を大切に生きて行きたいと思えます。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高